九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

パーラメンタリーディベートの教育効果と授業導入への提言

上土井，宏太
九州大学附属図書館

https://doi.org/10.15017/2228567

出版情報：基幹教育紀要. 5, pp.29-42, 2019-03-05. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

パーラメンタリーディベートの教育効果と授業導入への提言

上土井 宏太

九州大学附属図書館，〒819-0395 福岡市西区元岡 744

The educational effect of parliamentary debate and suggestions for introducing it into university class

Kota JODOI

Kyushu University Library, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

E-mail: jodoi.kota.031@m.kyushu-u.ac.jp

Received Oct. 30, 2018; Revised Dec. 1, 2018; Accepted Dec. 1, 2018

Parliamentary debate(PD) has been spreading rapidly. It is thought that it improves abilities of impromptu public speaking and effective oral presentation and it invokes interests in social problems. However, there are few reports on educational impacts of PD. To investigate it, I conducted two interviews to students/graduates of English Speaking Society(ESS) who are/were involved in PD. In one interview, I asked the abilities they acquired through it. The results indicate that PD is effective to improve various things including, but not limited to, presentation skills, critical thinking skills and the ability to accept others. I also found the experience of PD is effective not only while at school but also in the society. In the other interview, I asked the change of the TOEFL-ITP score of ESS students, which showed PD has high possibility to contribute to improve their English ability. The uniqueness of PD is students could improve previous mentioned skills simultaneously. In conclusion, PD has a strong affinity to general education course in universities, as PD could give students a basis of professional education and research.

1. パーラメンタリーディベートの現状と課題

パーラメンタリーディベート(PD)は、即興型ディベートとも言われ、英国議会を模したディベートのことである。ある議題について、肯定側（与党）と否定側（野党）に分かれ、第 3 者である審査員を説得する。審査員は、標準的な知識を持つ人(Average Reasonable Person)であるとされ、スピーチの内容や表現を総合的に判断して勝敗を決する。

PD の特徴は、以下の 2 点が挙げられる。1 点目は、議題が発表されるのが試合開始の 20 分前（ディベートのスタイルによって若干の違いはある）であり、準備時間が他の形式のディベートと比べて短い点である。短い時間で自分たちの主張を考え、スピーチをまとめる必要があるため、日ごろから様々な情報に触れ、幅広い人々の意見に耳を傾ける必要がある。2 点目は、試合毎に論題が変わるため、幅広い分野について知ることができる点である。論題は、政治、経済、教育、医療、国際関係などから出題されるため、自分の興味のある分野、専門分野だけでなく、他分野の現状や起

Bulletin of KIKAN Education, Vol. 5, 2019
© 2019 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

きている問題を知ることができ、幅広い知識を持ったジェネラリストの育成に役に立つと考えられる。具体的な論題例については、末尾の付録に掲載した。

このような利点を背景に、PD に取り組む人々は年々増えており、最近では、一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会が、高等学校の授業へ PD を導入するための普及活動を行っている。平成 28 年度には、文部科学省の支援を受けて、千葉県、沖縄県、大阪府で高校教員に対する PD 実践研修を行っており、これを経験した過半数の教員が「教員の資質・能力向上に効果的」であると述べており、さらに「アクティブラーニングを学ぶ上で、PD での分析や即興力は効果的である」としている [1]。

世界に目を向けると、年末に開催される PD の世界大会(World Universities Debating Championship)には世界各地から 400 チームが集まり、審査員も含めると参加者は 1000 名を大きく上回る世界最大のディベート選手権である。また、PD 経験者の実社会での活躍も著しく、アジアのトップディベーターの一人であった Syed Saddiq は、2018 年 7 月 2 日に 25 歳でマレーシアの青年・スポーツ大臣に就任し、青年・スポーツ省とアジアでも有数のディベート強豪大学である International Islamic University Malaysia が協力して、ディベート教育に力を入れて行くことを表明している [2,3]。

九州大学においても、英語研究部(ESS)の中で PD に取り組んでいる人数は 50 人を超えている（平成 30 年 9 月現在）。また、2014 年から、毎年 8 月に日本で唯一の世界大会形式の PD 国際大会である Kyushu Debate Open を言語文化研究院の井上奈良彦教授による支援を受けて九州大学において開催しており、日本、韓国、中国、マレーシア、シンガポールなど広くアジアの国からディベーターが参加していて、九州大学における PD の活動は非常に活発になっている。

このように、PD には昨今注目が注がれているが、教育効果については、中野(2011)が日本語 PD の経験者に質問紙を用いて調査を行った報告 [4] がある以外には、PD についての報告は未だになされていない。

筆者は、九州大学において英語で PD を経験した学生及び卒業生にインタビューを行った（調査概要は第 2 章に記載）。第 3 章では、彼らが PD から何を学び、どのような影響を受けたのか考察した。また、第 4 章では、英語で PD を行っている学部 2 年生の TOEFL-ITP の成績の変化を分析し、PD が英語学習に与える影響を分析した。最後に第 5 章で、結言として、これらの分析を踏まえ、PD を授業に取り入れる可能性について提言を行う。

2. 調査の概要

2.1. インタビュー調査

九州大学 ESS で英語ディベートを行っている又は行っていた 9 人に対面インタビューを行った。被験者の情報は表 1 に示す通りである。PD 歴は、実際に被験者が ESS において PD を行っていた期間を記載した。なお、ESS における PD の練習頻度は、平日約 3 時間、休日約 7 時間で、週に 2 日（平日 1 日、休日 1 日）行っており、平日又は休日のどちらかの練習には基本的に参加していた期間を PD 歴としている。

表 1 被験者の情報（平成 30 年 9 月現在）

	学部/学府	学年 or 職業	PD 歴
A	文学部	3 年	2.5 年
B	理学部	3 年	2.5 年
C	芸術工学部	3 年	2.5 年
D	経済学部	4 年	3 年
E	経済学部	4 年	3 年
F	教育学部	4 年	3 年
G	法学部/地球社会統合科学府	修士 2 年	6 年
H	経済学部	出版業	4 年
I	経済学部	高校英語教員	4 年

インタビューは表 2 に示す質問で構成し、全て複数回答可とした。なお、筆者から回答項目を示すことはせず、筆者が質問をし、被験者がその場で思い浮かぶ事項を回答してもらった。

表 2 被験者への質問内容

	質問事項
1	ディベートをして身についたと思う能力は何ですか。
2	ディベートで身についた能力が役に立ったと感じたのはどんな場面ですか。

2.2. 英語力調査

九州大学では、入学時及び学部 2 年時に全学生が TOEFL-ITP を受験している。現在 ESS に所属する学部 2 年生を対象に、この点数を調査し、PD の英語力に対する影響を考察した。なお、学部 2 年時に試験を受けているため、その段階で、全ての被験者は PD 経験年数 1 年である。被験者の学部・学科構成を表 3 に示す。

表 3　英語力調査の被験者所属構成（平成 30 年 9 月現在）

	学部・学科
A	工学部建築学科
B	工学部物質科学工学科
C	工学部物質科学工学科
D	工学部地球環境工学科
E	工学部地球環境工学科
F	医学部保健学科
G	理学部数学科
H	経済学部
I	文学部

3. インタビュー結果と考察

3.1. インタビュー結果（質問 1）

質問 1「ディベートをして身についたと思う能力」を問うたのに対し、表 4 に示す回答を得た。

表 4　質問 1 に対する回答

	回答	回答者
①	英語能力	A, C, D, F, I
②	論理的・批判的思考力	A, C, D, E, F, H, I
③	様々な分野の知識	A, B
④	人前で話すことに抵抗がなくなった	B, F
⑤	スピーチを分かりやすく構成する能力	D, E, G
⑥	自分と立場が違う人に対する寛容さ	D

5 人の被験者が、「①英語能力」が身についたと感じている。被験者 A と C の回答を以下に引用する。

高校のときから英語は得意だったが、大学で PD を始めて、スピーチを初めてしたとき、1 分ぐらいしか喋れず愕然とした。PD を続けることで徐々に即興で英語を話す能力が身につき、半年ぐらいで 7 分（筆者注：PD の 1 人当たりのスピーチ時間は 7 分）きちんと喋れるようになった。PD をやっていなかったら、英語を話す能力はこんなに身についていなかったと思う。（被験者 A）

PD をしばらくやった後、授業で英語のスピーチをする課題があった。周りの友達は即興でのスピーチに苦労していたが、自分は PD で 7 分喋る練習をしていたので、問題なくスピーチをすることができ、高い評価をもらうことができた。そのときに、自分の英語力、特に Speaking の能力が上がっていることを実感した。（被験者 C）

引用した 2 人以外の被験者も同様に Speaking 能力が上がったと感じていた。

9 人中 7 人の被験者が回答した「②論理的・批判的思考力」について詳細を尋ねたところ、「物事を多角的に見ることができる能力」という回答が全ての被験者から得られた。被験者 E と I の回答を以下に引用する。

物事を多角的に見る事ができるようになった。例えば、「Basic income は人々に幸福をもたらす」というニュースを見たときに、その主張の根拠に注目し、「幸福をもたらさない」という視点での意見も考えるようになった。これは、ディベートで、自分の意見とは関係なく、賛成・反対の立場で議論していたことで身についた能力だと思う。（被験者 E）

巷に溢れている情報を鵜呑みにせずに、いろんな情報を集めて、自分の考えをブラッシュアップさせる癖がついた。直感的に正しい、と思うようなニュースや記事であっても、それはどんな理由に基づいているのか、引用しているデータは正しいのか等、自分の考えをより正しく、正確なものにするよう意識し始めたと思う。（被験者 I）

被験者 E が述べているように、ある議題に対して、賛成・反対の双方から意見を論じる PD を通して、物事を自分が正しいと感じる側面から捉えるのではなく、自分とは違う人々の立場を考慮して考える能力が身につくものと考えられる。この能力は、自分の意見をより説得力のあるものにするだけでなく、特に、異なった価値観を持つ相手との議論において、相手の意見を尊重し、実りある議論にするために重要な能力である。

また、被験者 I が述べているように、インターネットで玉石混交の情報にアクセスできるようになった今日において、情報に触れたときに、それを多角的に捉え、客観的な視点で情報を分析する能力は不可欠である。

次に、「④人前で話すことに抵抗がなくなった」という回答について、被験者 F の回答を以下に引用する。

高校までは、人前に出ることすら嫌だった。大学で PD を始めて、最初は人前でスピーチをするだけで緊張して上手くスピーチができなかったが、何度も人前でスピーチを行うことで、段々と人前に立つことに慣れてきて、人前で話す度胸がついたと思う。「どんなに緊張したり、話すことが上手く思いつかないときも、ひとまず前に立って喋ろう。」と思えるようになった。（被験者 F）

被験者 F が述べているように、複数人の前で何度もスピーチをする機会が与えられる PD を通して、段々と人前に出ることに対する抵抗感が無くなったものと考えられる。この能力は、プレゼンテーションを行う学会発表等、人前で話す機会が増えている現代において、不可欠な能力である。

次に、「⑤スピーチを分かりやすく構成する能力」について、「ディベートの練習で繰り返し強調するスピーチの枠組みが、他の場面でも役に立った」という回答が見られた。具体的には、ディベートにおいて物事を説明するときに、相手に伝わりやすくするように、Assertion（主張）→Reason（理由）→Example（具体例）→Assertion（主張）という順番で話す AREA という表現手法を繰り返し訓練したため、自然と日常の説明でも分かりやすく話すことができるようになった、という回答が得られた。被験者 E の回答を以下に引用する。

> 自分が人と話したりスピーチをするときに分かりやすく喋ることができるようになっただけでなく、相手の話を聞くときやディスカッションをするときにも、常に話を Assertion（主張）、Reason（理由）、Example（例）に分解して聞くようになった。例えば、講義を聞くときも、「今、先生は主張を話していて、具体例もあったけど、理由が分からなかったから、講義の後で聞きに行こう。」など、人の話を分解・分析して聞くことができるようになったことで、自分の人の話に対する理解度も同時に高まった。会議等、グループで議論をするときも、「主張はいくつも出ているから、ここで私が理由を提示すれば議論が円滑に進む。」などと考えて議論全体を俯瞰できるようになった。（被験者 E）

最後に、被験者 D が回答した「⑥自分と立場が違う人に対する寛容さ」について分析する。まず、以下に被験者 D の回答を引用する。

> 自分は大学入学当時、保守的な考え方を持っており、革新的な考え方をする人のことが理解できず、理解しようともしていなかった。しかし、ディベートをやることで様々な意見に触れ、革新的な考えの人が何を考えているのか、その理由は何なのか、ということも考えはじめ、彼らには彼らなりの正しい主張があるのだと気づいた。それ以降、自分が絶対的に正しいと思っている主義・主張であっても、相対する考え方に耳を傾けることが大事で、適切なものであれば、その主義・主張も同様に尊重しなければならないと考えるようになった。（被験者 D）

被験者 D が指摘しているように、PD では試合毎に議題が変わり、立場も変わることから、様々な考え方に触れる機会が訪れる。これは即興型のディベート形式に特有の性質であり、数ヶ月から半年に渡って一つの論題について徹底的にデータを調べる調査型と比べ、即興型は毎回議題が変わるため、様々な価値観に触れることができるという利点がある。

3.2. インタビュー結果（質問 2）

質問 2「ディベートで身についた能力が役に立ったと感じたのはどんな場面ですか」と問うたのに対し、表 5 に示す回答を得た。

表 5　質問 2 に対する回答

	回答	回答者
①	文章を書くとき。構成、言葉に気を使うようになった	A, D, E
②	強いメンタルが必要とされる場面	B
③	外国人とのコミュニケーションが円滑に進んだとき	C, F, G
④	就職活動時	D, H
⑤	発表を伴う講義で高い評価を得ることができたとき	F
⑥	就職後の仕事において	H, I

まず、被験者 A, D, E が回答した「①文章を書くとき。構成、言葉に気を使うようになった」という点について考察を行うため、被験者 A の回答を引用する。

> ディベートを始めるまでは、自分が思いついたことをそのまま書いてレポートにしていたが、ディベートを始めてから、レポートに使う言葉に気を使うようになった。この言葉を使うと相手はどう感じるか、という点や、この文章に対しては相手がこう反論してくるだろうから、事前に説明を入れておこう、など相手のことを考えて言葉を選びレポートを書くようになった。また、どの順番で主張、理由などを書くとより自分の意図が伝わりやすいかという点についても考えるようになった。（被験者 A）

D, E も同じように、レポートを書く際に、レポートの構成、言葉遣いにより気を使うようになったと回答している。これは、ディベートでスピーチを考える際に、相手の反論をあらかじめ予測してスピーチを組み立てる、審査員に伝わるためにはどの言葉を使えばいいか、などのことを何度も考え続けた結果、文章を書く際にもこの考え方が応用されたのだと考えらえる。この能力は、講義のレポートを提出するときだけでなく、卒業論文や学術論文を執筆する際にも活用することができる。PD のスピーチにおいては、

（1）現状の問題分析
（2）それを解決する手段（プラン）の提示
（3）その手段をとった場合にどのようにして現状の問題が解決するのか
（4）それがなぜ大事なのか/どういう利点をもたらすのか

という順番でスピーチを構成することが多い。これは、IMRaD と呼ばれる学術論文の構成とよく似通っている。PD のスピーチと学術論文の構成の対応を表 6 に示す。

表 6　PD スピーチと学術論文構成の対照表

PD スピーチ	学術論文
現状の説明	Introduction
どのようなプランを採用するのか	Method
プランを採用した結果どうなるのか	Result
プランによる変化はなぜ大事なのか	Discussion
スピーチのまとめ	(Conclusion)

このように、PD のスピーチ構成を考えることで、学術論文で必要とされる論文の構成を無意識のうちに身につけることができ、実際に学術論文を執筆する際も説得力のある論文を書くことに寄与すると考えられる。

次に、「②強いメンタルが必要とされる場面」と回答した B の回答を引用する。

> PD を始めた頃は、言いたいことは思い浮かばず、思い浮かんだとしてもそれをうまく英語で表現できなかったので、何度も失敗するという経験をした。ディベートを 2 年間やった今でもスピーチの後に後悔することが多々ある。PD では、そのスピーチに対してその場で審査員からフィードバックがもらえるので、何が悪かったのか自分で考えて次に活かすことができる。そのような経験を通して、失敗することが怖くなくなり、失敗から学ぶ習慣がついた。また、失敗しても怖くなくなったことから、あまり自信がなくても人前で堂々とスピーチをすることができるようになった。(被験者 B)

このインタビュー結果は、次の 2 点で PD が学習及びプレゼンテーション能力育成に関して重要な要素を含んでいることを示唆している。

1 点目は、PD は失敗から学ぶことの重要性を体感することができる、という点である。失敗やミスをしたときに重要なのは、それがなぜ起きたのか、二度と失敗を繰り返さないためにはどうしたらよいのか、という 2 点を考えることにある。PD では、試合の後すぐに審査員から試合に対する講評、それぞれのスピーチに対する講評が行われる。これを通して、自分のスピーチには何が欠けていたのか、それを改善するにはどうしたらよいのか、という 2 点について、客観的な立場でスピーチを見た審査員からコメントをもらうことができ、その場で振り返りを行うことができる。この経験を繰り返すことで、普段の学習でも、自分の足りない点を意識し、それに対する改善点を考える意識を醸成することができると考えられる。

2 点目は、nonverbal communication の能力を高めることができる点である。著名な言語学者である Birdwhistell(1970)は、会話ややりとりのうち、言語により相手に伝えられる割合は 30〜35%程度であると推測している [5]。それを踏まえ、Marjorie Fink Vargas(1986)は、

> Ray L. Birdwhistell, a leader in the field of nonverbal communication, analyzes interpersonal

communication this way : In a conversation between two people, only 35 percent of the social message is conveyed by the words. The remaining 65 percent is communicated nonverbally, by how they speak, move, gesture, and handle spatial relationships.

と述べており、人々の会話のうち、言語により伝えられるメッセージの割合は35%に過ぎず、残りは nonverbal によるものであると指摘している[6]。Nonverbal に含まれるジェスチャーや堂々と喋る能力等、多くの能力は PD でのスピーチを通して身につけることができるものである。つまり、PD を実践することにより、議論やプレゼンテーションで必要とされる能力の多くを身につけることができる。

次に、「③外国人とのコミュニケーションが円滑になった」という回答について被験者 C と F の回答を引用して考察を加える。

１年のときにずっと練習に参加していたため、春休みにアメリカとシンガポールに行った際、英語を話すことにほとんど抵抗がなく、英語でのコミュニケーションに苦労した記憶はあまりない。また、文化の違いをすぐに受け入れることができ、現地の人と友達になることができた。例えば、日本にはあまりいない vegetarian の友人や LGBT の友人と関わることがあったが、PD でそれらの人々に関する論題を議論したことがあったため、彼らの文化や存在を抵抗感なく受け入れることができた。（被験者 C）

２年生のとき、ニュージーランドに約２ヶ月ホームステイに行ったが、英語を喋るのには困らなかった。むしろディベートで 7 分間喋るのに比べたら全然楽だと思った。（被験者 F）

ここでは、2 つのことが述べられている。1 つは英語力、もう 1 つは異文化に対する理解である。英語力に関しては、ディベートを通して相手の話を聞く Listening 能力、7 分間自分の主張を伝える Speaking 能力を鍛えることができ、さらにスピーチ中に即興で議論のやりとり（PD では、相手のスピーチ中に許可を得て質問をすることが認められている）も行われるので、実際のコミュニケーションに近い形の訓練を積むことができる。

ここで注目したいのは、相手の文化を理解するのが容易であった、と述べている被験者 C の発言である。PD においては、文化に関する論題を扱うことも多い。一例を挙げると、

This House prefers a monocultural society over a multicultural society.

（複数の文化が存在する社会よりも一つの文化が存在する世界の方が好ましい）

このディベートにおいては、人々にとって文化とは何なのか、異なる文化が存在することによりどんな利益/不利益が存在するのか、といった論点が議論されることが多い。この準備時間、試合を通して、身近なように感じる文化という事象についてより深く、客観的に考えることで、文化の重要性を理解でき、実際に異なる文化の人と接する際に、彼らの文化を尊重するような態度が身につくのではないかと考えられる。被験者 C 自身も、文化に関する論題を複数議論したことにより、文化を尊重することの重要性を認識したと述べていた。さらに、3.1②で示した「物事を多角的に見る能

力」も文化を相対的に捉え、尊重する態度を醸成していると考えらえる。

次に「④就職活動時」、「⑥就職後の仕事において」という 2 つの回答を取り上げる。今回インタビューを行った被験者のうち、被験者 H と I の 2 人が卒業生であり、2 人とも仕事においてディベートの経験が役に立ったと述べている。被験者 H と I の回答を引用する。

> 仕事を始めてから、会社の製品やサービスをお客様に紹介することが多い。そのときに重要なのが、どんなサービスを紹介しているのか、それを買う（使う）ことでどのような利点があるのか、それはどのくらいよい影響をもたらすのか、という 3 点を分かりやすく説明することである。これはまさに PD で経験したスピーチの構成と全く同じであると気づいた。PD のスピーチのように、要点に番号を振るなどしてスピーチの構造を分かりやすくしたり、例を入れながら話すことを意識し始めた結果、製品やサービスを買ってもらえることが多くなった。（被験者 H）

> 高校で生徒に英語を教える際、特に Speaking を教えるときに、どのようにすれば分かりやすく伝わるスピーチをすることができるのか、自分の経験から伝えることができる。PD 以外では、このような技術を学ぶ機会がなかったので、PD をやっていたことで、生徒に対する指導がうまくいっていると感じている。特に最近は文部科学省が 4 技能を身につけるように方針を掲げているので、Speaking の指導に関しては、周りの先生からも頼りにされることが多い。（被験者 I）

H と I では、従事している産業分野は全く違うものの、それぞれの分野で、PD で学んだことを活かしていることが分かる。被験者 D と被験者 I は、就職活動においても、PD で学んだことは有効であったと回答している。今年、就職活動に取り組んだ被験者 D の回答を引用する。

> 就活の全ての段階において PD で学んだ論理力を活かすことができた。エントリーシートを書くときは、自分がなぜこの企業に入りたいのか、きちんと論理が成り立つように気をつけて書いた。選考過程のグループディスカッション(GD)では、議論の流れを冷静に整理して、これまでの議論で何が欠けているのか、ということを PD でスピーチを聞く要領で分析していた。それを指摘することで、議論をうまく時間内にまとめることができ、GD はほぼ全て通過することができた。面接でも、自分の言葉一つ一つに気を配って、どうすれば言いたいことが全て伝えられるか、PD のスピーチを意識して臨んだ結果、高く評価され、無事、第一志望の企業から内定を頂くことができた。（被験者 D）

被験者 D が述べているように、PD と就職活動で求められる力、すなわち社会に出てから求められる力には強い相関がある。PD が、自分の意見を短い時間でまとめ、審査員に分かりやすく伝えることが求められる競技であるのに対し、就職活動は、自分の意見を分かりやすく面接官に伝える、

面接官の質問に対する意見を即興でまとめ、分かりやすく伝える、という能力が求められる。

東京大学新聞が 2018 年度の東京大学新入生 3132 人の 92%に当たる 2866 人に行った調査によると、41%の新入生が就職に不安を持っていることが分かった [6]。就職活動においては、大学生活で何をしてきたか、ということが最も問われるので、研究・課外活動等に力を入れなければならないことはもちろんであるが、それをどう話すか、という側面も重要な能力として求められることを考えると、基幹教育の対象である新入生が PD に取り組む意義・意欲は高いと考えられる。

4. PD 経験者の英語力の変化と考察

表 3 で示した学部 2 年生の TOEFL-ITP の成績の変化を表 7 に示す。

表 7　TOEFL-ITP の成績の変化

	入学時	学部 2 年時	変化
A	470	530	+60
B	440	490	+50
C	510	510	0
D	510	550	+40
E	430	570	+140
F	453	483	+30
G	497	550	+53
H	480	510	+30
I	493	483	-10
平均	476	519	+43

入学前の TOEFL-ITP の平均点は 476 点であったのに対して、学部 2 年時の平均点は 519 点となっており、変化の平均は+43 点となった。個人の得点の事前事後の変化を見るために t 検定を行った結果、統計的に優位であった（N=9, t=3.04, df=8, p＜0.05）。また、TOEFL-ITP の実施主体である ETS が発表している TOEFL-ITP の統計的信頼性は±13 点 [7] であることを踏まえても、試験前後で有意な変化が見られたと言える。最も得点の変化が大きかった被験者 E に「どのようなことがこの変化に寄与していると思うか。」質問を行った。被験者 E の回答を以下に引用する。

> 大学に入った当時は英語が苦手だったため、英語を頑張ろうと思って ESS に入った。最初は全く相手の英語を聞き取れなくて辛かったが、練習を重ねる毎に徐々に聞き取れるようになり、自分も少しずつ喋る時間が長くなるのが嬉しかった。PD 以外にも英語の勉強を頑張ったので、英語力の伸びには PD だけが関係しているとは思わないが、PD がきっかけで英語をもっと学びたいと思えるようになった。Listening は相手の英語を聞き取る練習をすることで、Reading は PD で使う単語をたくさん覚えることで、また情報収集の際に英

語の記事を読んだりすることで点数が伸びたように思う。(被験者 D)

被験者 D が言及しているように、TOEFL-ITP の点数変化のうち、PD がどの程度の寄与をしているかを正確に測ることはできない。しかしながら、英語学習の動機付として、PD が一つの要素となっている可能性は高いと考えらえる。今後は、更に、PD で伸びる能力の一つであると考えられる Speaking についても、PD を経験する前と後で TOEFL-iBT 等の試験結果が変化するのか、また、スピーチの構成がどのように変化するのか等を分析することにより、PD の英語能力向上への寄与を明らかにする予定である。

5. 結言

インタビューの結果より、PD により身につくと考えられる能力は以下の 3 点に大別される。
(1)英語能力
(2)批判的・論理的思考力
(3)スピーチ能力
(1)については、第 3 章のインタビュー及び第 4 章において PD 経験者の PD を始める前と後の TOEFL-ITP の試験結果を比較することによって示した。第 3 章では 9 人中 5 人が、英語能力が身についたと感じており、第 4 章では 9 人中 7 人の TOEFL-ITP の得点が上昇し、PD を 1 年間経験した後の試験成績の変化は 9 人の平均で+43 点という結果が得られた。PD が直接的にどの程度英語力の伸びに関与しているかは明らかではないが、インタビューの中で過半数の被験者が英語能力特に Speaking 能力が身についたとしており、さらに TOEFL-ITP という客観的な指標になりうる試験において、統計的に優位な差を得られたことは、PD の英語力向上に対する影響を強く示唆する結果となった。
(2)は、今回インタビューを行った 9 人のうち、最も多い 7 人が回答した能力である。PD の特徴である複数のテーマの論題を様々な賛成・反対の立場から考えることで身につくと考えられる能力である。具体的には、自分に与えられたテーマについて、論理的正しさを考慮しつつスピーチを考える過程で、「自分の考えていることは本当に論理的に正しいのか」、「相手の言っていることはどういうことで、どう反論できるのか」等の思考を巡らせることで、一つのテーマについて批判的に考える態度を養うことができることを明らかにした。
(3)のスピーチ能力については、審査員に自分の言いたいことを伝えるために、スピーチの構成を分かりやすくする能力及びスピーチに臨む前向きな態度を身につけることができることを明らかにした。
この 3 つの能力は、大学における研究及び実社会に出てからも必要とされる能力で、大学初年時において身につけることが強く推奨されると考えられる。重要な点は、PD を実践することで、この 3 つの能力を同時に身につけることができるということである。それぞれの点は、他の講義でも身につけることができるが、これを全て同時に身につけることができるのは、他の講義にはない PD の特徴である。

これらのことを踏まえると、PD を大学初年次教育に導入することは、意義のあることだと考えられる。

付録 2018 年 Kyushu Debate Open 議題一覧

予選 1：This House Believes That developed countries should pay developing countries to protect ecologically important land and/or waters from economic exploitation (e.g. deforestation, mining, fishing)
（先進国は、生態系にとって重要な土地や水域を経済的搾取（森林破壊、採鉱、漁業）から守るために、途上国に資金援助を行うべきだ）

予選 2：This House rejects all narratives that depict Inseki-Jisatsu as honorable
（引責自殺が名誉であるかのように描写しているあらゆる言説をなくすべきだ）

予選 3：Assuming the development of Artificial intelligence (AI) medical robots that are proven to perform better than human doctors, This House Would conceal all incidents of medical accidents caused by AI.
（AI 医療ロボットが、人間の医師より上手に医療行為ができるぐらい発達したと仮定する。このとき、AI 医療ロボットが引き起こしたすべての医療事故を隠すべきだ）

予選 4：This House Would institute a quota for female leaders in academic institutions/organizations.
（大学や研究機関に女性管理職を一定数導入するべきだ）

pre-準々決勝：This House Believes That it is never justified to assassinate state-sponsored scientists and researchers conducting research into weapons of mass destruction.
（国の支援を受けて大量破壊兵器に関する研究をしている科学者や研究者を暗殺することは決して正当化されない）

準々決勝：This House Believes That LGBTQ+ activists in non-Western countries should use and advocate for LGBTQ+ rights and individuals using their local historical terms instead of Western terminology.
（非西洋で活動している LGBTQ+活動家は、西洋の言葉を使うのではなく、彼ら自身の地方で歴史的に使われている言葉を使う個人を支持すべきだ）

準決勝：This House Would hold bystanders of all sexual harassment liable for their failure to help.
（セクシュアルハラスメントを見て見ぬ振りをした人々に法的な責任を負わせるべきだ）

決勝：This House regrets stigmatization of outsourcing eldercare* in Asian societies (*=sending your parents to assisted care facilities/retirement communities)
（アジア諸国において、eldercare を外注することに対する不名誉はないほうがよい。ここで、eldercare とは、両親を介護施設や、退職者共同居住地に送ることを指す）

謝辞

本研究を遂行するにあたって、インタビューに献身的に協力してくれた九州大学 ESS の後輩たちに感謝します。彼ら/彼女らの協力なしにはこの論文は完成しませんでした。

また、統計的解析手法についてアドバイスを頂いた名古屋大学大学院教育発達科学研究科山形伸二准教授（当時は九州大学基幹教育院准教授）に感謝致します。最後に、本研究を継続的にサポートして頂き、論文構成に関して有益なアドバイスを数多く頂いた、九州大学言語文化研究院井上奈良彦教授に感謝致します。

参考文献

[1] 即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施　平成 28 年度　成果報告書, 3, 2007（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/03/1395704_01.pdf） 2018 年 11 月 20 日閲覧

[2] JETRO HP（https://www.jetro.go.jp/view_interface.php?blockId=27111208）2018 年 9 月 19 日閲覧

[3] Youth and Sports Ministry, IIUM jointly organise monthly debate series (http://www.theborneopost.com/2018/09/13/youth-and-sports-ministry-iium-jointly-organise-monthly-debate-series/) 2018 年 9 月 19 日閲覧

[4] 中野　美香, 議論能力の熟達化プロセスに基づいた指導法の提案, ナカニシヤ出版, 47-69, 2011

[5] Ray Birdwhistell, Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication, University of Pennsylvania Press, 157-158, 1970

[6] Marjorie Fink Vargas, Louder than Words: An Introduction to Nonverbal Communication, Iowa State University Press, 10, 1986

[7] 東京大学新聞 2018 年 4 月 17 日号

[8] https://www.ets.org/s/toefl_itp/pdf/toefl_itp_score.pdf(2018 年 10 月 28 日閲覧)